

# いの流水俳壇

松尾 満津於選

## 「当季雑詠」

百歳へ夢ふくらませ春を待つ

片岡 包女

(評) 作者自身の日常を、じつと見据えた作品である。

作者は既に九十歳を越え、百歳という、もう一桁上がりの人生を<sup>ことほ</sup>寿ぎたいと、考えているのである。その生々しい現実に作者の年輪が居座っている。男性的な考え方、意気込みには他人の<sup>は</sup>入る隙がなく、百歳に達してもまだ<sup>かくしゃく</sup>矍鑠としている作者の姿を想像するとき人生とは、何かということを考えさせてくれた句である。

飛び石は老の歩幅を越えた冬

間 浩太

(評) 秋から冬へ、見えるかぎり荒涼とした枯れ一色、その中を流れる冬の溪谷の飛び石、或いは伝い歩くため庭などにな

らべた敷石等、冬は凍っているかも知れず迂闊には飛べない、渡れない、夏は雑作なく身軽に動けた飛石の間隔だが、寒い冬では思い通りには動けない。「歩幅を越えた冬」と言い止めた季語の働きが、寄る年波には勝てないという現実を語り得て妙。

湯気満たす冬の湯舟の安堵かな

井上 郁子

(評) この句の冬の湯舟は、柚子湯であろうか柚子を真二つに切って湯に入れ芳香豊かな柚子風呂、黄色く熟れた柚子の色と香り「かな」と切り取ったこの句に容易ならぬ「ゆとり」を感じる。

またもとの二人に<sup>しめはず</sup>戻り注連外す

川村 博子

(評) またもとの二人、は平常の生活状態が二人きりであるということ。正月も過ぎれば、神棚や、彼方此方に飾っていた注連がすべて取り除かれ、正月行事が終わった状態を言い、誰にも左右されない、そして二人きりの時間である。

「人間万事塞翁が馬」(人の運命は定ま

りないものであるから、幸福になったといつて喜ぶこともなく不幸になったと

いつて悲しむに当たらない) である。もとの二人は所詮、もとの夫婦、新しい年も矢張り二人の信頼から始まる。

窓際の冬日漉き込む里日和 刈谷 志津

孫の顔崩れてゆくやお年玉 大川 節弥

初明かりカーテン揺れてナースの声 友草 水月

凜として風の只中野水仙 津田 久美

神域や広々ましろ雪清し 弘瀬うき子

初詣孫の願いは態度にも 野本 則昌

降る雪やわけても京都金閣寺 伊藤 萩甫

枯れ葉にも似せて蓑虫揺れている 竹崎たかひろ

野辺に立ち今年を思うウサギ年 筒井 正子

淀みなき人の流れや初詣 岡本とも子

凍星に紛れし山里の灯の幾つ 竹崎 光子

北山に降る雪模様猫蹴む 森岡 照月

学校がなくなる話年明け 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」五句  
締め切り 毎月十五日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

867-2133

## 今月のことも川柳

太陽は <sup>みんなをうつむ</sup> まもり神

(評) 小学3年生の鋭い感性、少しでも川柳が好きになってくれると嬉しい。

お正月 <sup>かどまろし</sup> たかはし

(評) 一番嬉しいのはお年玉では...お正月のルンルン気分が伝わってきます。

お正月 <sup>みんなをわいわい</sup> カルタとり

(評) 昔も今もかわらないお正月のカルタとりを受け継ぐ子どもたち、大切に見守っていきなさい。

今日だけは <sup>早くねむろう</sup> クリスス

(評) 子どもへの期待と素朴な気持ちに句にあふれています。

大みそか <sup>紅白合戦</sup> 応援だ

伊野小6年 森田航太郎

さむいひが <sup>ずうとちづく</sup> ふゆやすみ

川内小1年 西内ことね

ぼくたちで <sup>みんなの世界を</sup> 守ろうよ

下八川小5年 柿内 大貴

朝起きて <sup>ふとんに入</sup> 二度寝した

清水第一小6年 西峰 奨真

先生は <sup>笑わせるのが</sup> とくだよ

川内小4年 大久保 朋美

どんぐりを <sup>ころころひろ</sup> かきりみち

川内小2年 越智 美空

冬げしき <sup>今年は見えて</sup> よかつたな

長沢小6年 筒井 美咲

坂道で <sup>ソリで滑った</sup> しりいた

長沢小5年 川村 綾乃

しも柱 <sup>朝日に照らされ</sup> ダイオのよう

清水第一小6年 井上 瑞菜

※「ことも川柳」は町内全小学校の児童の皆さんを対象に募集しています。次回提出締め切りは5月20日です。たくさんの方の皆さんの応募をお待ちしています。(応募は各小学校を通じてお願いします。)

※選評は、川柳連会の皆さんにお願いしています。